種生物学会ニュースレター

The Society for the Study of Species Biology Newsletter No. 53

今年度のシンポジウムはオンラインで開催します　1
第 52 回 種生物学シンポジウム（オンライン・滋賀）のご案内　1
第 51 回 種生物学シンポジウム（宮崎）の記録　5　/　事務局からのお知らせ　7　/　会計報告　8

今年度のシンポジウムはオンラインで開催します

会長　陶山 佳久

昨年 12 月に宮崎で開催された第 51 回種生物学シンポジウムのときには、まさか今年このようなコロナ禍に見舞われるとは、誰一人考えもしなかったことでしょう。このような状況下では、残念ながら通常の対面形式での種生物学シンポジウムの開催を断念せざるを得ず、オンラインでのシンポジウム開催とすることといたしました。

本来、この種生物学シンポジウムとしては、合宿形式を基本として、時間の許す限り若手からシニアまでが一緒になって熱い議論を繰り広げることができる機会を提供することを、本学会の最も大切な特色の一つとして重要視してきました。したがって、もしもその良さを発揮することのできないシンポジウムになるならば、開催を見送るべきではないかとも考えていました。しかし、たとえオンラインであったとしても、何とかしてこの種生物学会らしさを活かしたシンポジウムにすることができるのではないかと考え直し、オンライン開催とする決断をいたしました。現在、大会実行委員長である本庄三恵さんを中心として、種生物学会の良さを享受することができよう、工夫を凝らしたプログラムを計画しております。会員の皆様方には、是非ともオンラインシンポジウムにご参加いただき、一味違った研究情報交換の場を体感していただきたいと考えております。

参加者のみなさんとともに、実りあるシンポジウムにしたいと考えておりますので、積極的にご参加いただき、盛会へのご協力をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

第 52 回 種生物学シンポジウム（オンライン・滋賀）のご案内

シンポジウム HP　https://sites.google.com/view/sssb2020shiga

第 52 回目となる種生物学シンポジウムは、コロナウイルス SARS-Cov-2 感染症の拡大防止のため、初めてオンラインにて開催することになりました。期間は、2020 年 12 月 4 日（金）～6 日（日）の 3 日間です。これまで、合宿型の開催方式をとり、夜遅くまでポスターの前で熱い議論を繰り広げることが魅力でもある本シンポジウムを、コロナ渦の中で開催すべきなのか、もし開催するとすればどのような形で実行するのかを執行部や幹事会、実行委員会の中で議論を行ってきました。

シンポジウムのメインテーマは、「生物間相互作用」と「機能遺伝子」です。プレシンポジウムでは、植物と昆虫が織りなす化学物質を介したコミュニケーションについて発表していただきます。実行委員会企画のミニシンポジウムでは、分子手法の発達を活かして、適応進化を司る機能遺伝子とその調節メカニズムにまで迫ることに成功した研究例を紹介していただきます。和文誌編集委員会企画のシンポジウムでは、植物の多様な対被食者防御戦略について、紹介していただきます。

ポスター発表では、30 秒程度で発表内容を紹介するフラッシュトークを行うことで、全ての発表者の声と顔を皆様にお届けしたいと思います。これにより発表全体を俯瞰した上で、LINC Biz のチャット・ビデオ機能を用いて各ポスター発表者と議論を繰り広げることができます。また、ビデオ会議による懇親会を計画中で、興味のある研究内容や共同研究も含め、より一層議論を深めていただければと思います。

今年はオンライン開催となったことで、海外からの発表も予定しております。これまで、家を空けられないなどの理由で合宿型では参加が難しかった方でも参加しやすくなります。種生物学会ならでは、オンラインならではのシンポジウムとなるよう実行委員会一同準備を進めてまいりますので、皆様のご参加をお待ちしております。

申込み締切は 11 月6日（金）です

※ ポスター発表要旨の登録は 11 月 20 日（金）
※ 当日参加は受け付けませんので、ご注意ください

● **開催方法**

Zoom: 委員会、シンポジウム、受賞式、受賞講演
LINC Biz: ポスター発表コアタイム
※ すべてのセッションへは、LINC Biz にログイン後の大会トップページからアクセスしていただくことになります。

● **全体のスケジュール**（変更になる場合がありますので、最新の情報はウェブサイトでご確認ください）

12 月 4 日（金）

10:30–16:30	各種委員会
17:00–18:00	**プレシンポジウム「昆虫と植物の会話を解読する」**高林純示（京都大学）
18:00–19:00	ポスター発表フラッシュトーク（一人 30 秒）
19:00–	自由時間（LINC Biz ポスター閲覧など）

12 月 5 日（土）

9:00–10:15	片岡奨励賞授賞式・片岡奨励賞受賞講演
10:30–12:30	ポスター発表（コアタイム奇数） LINC Biz
12:30–13:30	お昼休憩
13:30–15:30	ポスター発表（コアタイム偶数） LINC Biz
16:00–17:40	**実行委員会企画ミニシンポジウム「分子が切り開く動植物の適応進化」**企画者：本庄三恵・工藤洋（京都大学）
17:50–18:50	総会
19:00–	懇親会

12 月 6 日（日）

9:00–10:00	PSB 論文賞・ポスター受賞者授賞式
10:00–12:25	**和文誌編集委員会企画シンポジウム「食べられないために守る術―植物の多様な対被食者防御戦略―」**企画者：坂田ゆず（秋田県立大学）・角田智詞（京都大学）
12:25–13:25	お昼休憩
13:25–17:00	**和文誌編集委員会企画シンポジウム（つづき）**

● **実行委員会企画ミニシンポジウム「分子が切り開く動植物の適応進化」**

12 月 5 日（土） 企画者：本庄三恵・工藤洋（京都大学）

シーケンス技術や分子生物学による機能解析の進展により、種間や集団、個体間の違いを、原因遺伝子やその機能のレベルでも解析することが可能となってきました。実験室内で得られたモデル生物での知見が、非モデル生物に適用できるようになることで、遺伝子レベルでの研究が種生物学のような野生生物を扱う分野でも可能となりつつあります。本シンポジウムでは、生物が新たな環境に適応進化することを可能にした原因遺伝子の発見やシロイヌナズナとその近縁の野生種を用いた適応進化研究の最先端を行くお二人にご講演していただきます。今後の種生物学研究が、どのように植物の遺伝子機能や分子機構に迫れるのか展望と課題について議論します。

16:00–16:05 趣旨説明

16:05–16:45 **「トゲウオから探る生活史の収斂進化の鍵遺伝子」**
石川麻乃（国立遺伝学研究所）
16:45–17:25 **「シロイヌナズナ近縁種のゲノム情報を利用した適応進化の解析」**
清水健太郎 (チューリッヒ大学)
17:25–17:40 総合討論

● 和文誌編集委員会企画シンポジウム「食べられないために守る術―植物の多様な対被食者防御戦略―」

12 月 6 日（日） 企画者：坂田ゆず（秋田県立大学）・角田智詞（京都大学）

植物と植食者は地球上の生物種およびバイオマスの約 4 分の 3 を占める自然界の主要な構成員である。4 億年にもおよぶ相互作用の中で、植物は植食者に餌資源を提供する一方、固着生物ならではの多様な防御形質を進化させ食害を防いできた。近年、変動環境下での植物と植食者の応答を理解することが求められている中、分子・個体・群集の階層をつなぐ植物防御に関するより詳細なメカニズムの解明がすすみ、さらに今まで見過ごされてきた多様な防御戦略が明らかになりつつある。本シンポジウムでは、温故知新をかねて植物防御に関する研究を温習し、さらに従来の植物防御の枠にとどまらず様々なアプローチから植物の防御戦略と植食者との相互作用について取り組んでいる研究者にご講演いただき、この分野の今後の新たな展望を探りたい。

10:00–10:10 趣旨説明 坂田ゆず（秋田県立大学）
10:10–10:55 **「森林の３次元構造が植物と昆虫の相互作用に与える影響」**
中村誠宏（北海道大学）
10:55–11:40 **「昨日の味方は今日の敵ー被食防御形態の進化で変わる植物間相互作用」**
鈴木亮（琉球大学）
11:40–12:25 **「植物による共生者の行動操作」**
山尾僚（弘前大学）
13:25–14:10 **「脂肪酸－アミノ酸縮合物をめぐる昆虫と植物の攻防」**
吉永直子（京都大学）
14:10–14:55 **「オトシブミが利用しにくい葉の形：葉形が植食者に与える影響と防衛としての可能性」**
樋口裕美子（神戸大学）
14:55–15:40 **「植物の視覚による対植食者防御」**
山崎一夫（大阪健康安全基盤研究所）
15:40–16:20 **「地下部も含めて考える植物防衛研究の行方：地上部と地下部の共通点と相違点、その連携」**
角田智詞（京都大学）
16:20–17:00 総合討論（コメンテーター：佐藤安弘（JST さきがけ/龍谷大学））

● 参加申し込み【11 月６日（金）まで】

シンポジウムウェブサイト上の「参加申込みフォーム」からお申し込みください。**シンポジウム参加費を振り込んだ後に、参加申し込みフォームの入力を行ってください。**

1. 参加費

学生（会員・非会員とも）	1,000 円
一般会員	2,000 円
一般非会員	3,000 円

–現在は非会員の方でも、参加申し込み前に入会した場合、学会員と同じシンポジウム参加費を適用します。種生

物学会への入会はオンライン（http://www.speciesbiology.org/entry/form.php）で行うことができます。
–ポスター発表を希望する方は、種生物学シンポジウム参加申し込みフォームで「ポスター発表をする」にチェックをしてください。
–ポスター発表の申し込みは、要旨登録より締め切りが早くなっていますので、ご注意ください。

2. 振込先

振込先は、大会ウェブサイト上で、10 月中旬ごろに連絡します。

- 参加費は、シンポジウム参加申し込みを行う前に、振替口座にお振り込みください。本シンポジウム専用の振込み用紙は準備しておりません。振込用紙が必要な場合は、郵便局備え付けの振込用紙をご利用ください。
- 振込後に受け取る「郵便振替振込請求書兼受領証」を必ず保管してください。種生物学シンポジウム参加申し込みフォーム入力の際に、振込情報が必要になります。
- 一旦振り込まれた参加費は返却できませんので，ご承知おきください。
- **11 月 6 日（金）以降は振り込みを受け付けません。当日参加は出来ませんので、ご注意ください。**

● ポスター発表要旨の登録【11 月 20 日（金）まで】

- ポスター発表をされる方は、最初に種生物学シンポジウムの参加を申し込んでから、ウェブサイト上の「ポスター発表登録フォーム」から発表内容を入力してください。ポスター賞の応募（学生会員のみ）は「ポスター発表登録フォーム」より申し込みください。
- 発表要旨は 700 文字以下で用意してください。
- **ポスター発表の申込者（発表者）は、2020 年度分の種生物学会会費納入済の会員に限ります**。非会員の方は、事前に入会をお済ませください。

● ポスター発表について

- 発表内容を PDF スライド 1 枚にまとめて 30 秒（予定）で紹介する「フラッシュトーク」の時間を初日に設けます。
- LINC Biz のチャンネルが発表ブースとなります。LINC Biz に画像形式でアップロードし、チャットとビデオ会議での質疑応答が可能です。シンポジウム期間中いつでもアクセスできますが、ビデオ会議の利用はコアタイムに限る可能性があります。ダウンロードは不可ですが、スクリーンショットの危険性は排除できません。詳細は、ウェブサイト上で随時連絡します。

● プログラムと要旨集

オンライン開催に伴い、今年度は冊子体のプログラム要旨集を発行しません。参加者には、電子媒体のプログラム・要旨集がダウンロードできる URL をご連絡します。

● 問い合わせ先

本庄三恵（京都大学 生態学研究センター）
E-mail：sssb2020shiga at gmail.com（at を@に置き換えて下さい）
Tel：077-549-8264（研究室直通）

第 51 回 種生物学シンポジウム（宮崎）の記録

2019 年 12 月 6 日（金）～8 日（日）コテージ・ヒムカ

プレシンポジウム

安田仁奈（宮崎大学）サンゴ礁生態系における生物多様性の研究 ～共生菌から生きる化石、サンゴ捕食者の種分化まで～

片岡奨励賞受賞講演会

廣田峻（東北大）送粉者との相互作用を介した花の進化

ミニシンポジウム「熱帯林の種生物学」企画者：矢原徹一（九州大）

北島薫（京都大）熱帯林生態学の新しい展開

保坂哲朗（広島大）熱帯多雨林における一斉開花と種子捕食

永濱藍（九州大）・田金秀一郎（鹿児島大）・陶山佳久（東北大）・矢原徹一（九州大）南ベトナム熱帯山地林の種多様性とフェノロジー

佐竹暁子（九州大）遺伝子発現によるフェノロジー研究」

和文誌編集委員会企画シンポジウム「使ってみよう先端技術！ —オミクス解析と形質測定で迫る植物の生き様—」 企画者：佐藤安弘（科学技術振興機構さきがけ/龍谷大）・村中智明（京都大）

佐藤安弘（科学技術振興機構さきがけ/龍谷大）趣旨説明

藤井壮太（東京大・農学生命）ゲノムワイド関連解析による異種花粉識別分子の発見

矢部志央理（農業・食品産業技術総合研究機構）ゲノミックセレクションによる作物育種の可能性ーソバを例にー

内藤健（農業・食品産業技術総合研究機構）ゲノムとトランスクリプトームでこじ開けたる。Vigna 属野生種の耐塩性進化

村中智明（京都大・生態研）光るウキクサで時計を見る：限界日長適応の基盤としての「概日」時計

吉田久美（名古屋大・情報科学）なぜ青いバラは咲かないのか、アントシアニンによる多彩な花色の発現機構

野田口理孝（名古屋大・生物機能利用開発研究センター/生命農学）異科接木の分子機構と技術開発

総合討論（コメンテーター：奥山雄大）

ポスター発表

中濱直之（兵庫県立大・兵庫県博）・井鷺裕司（京都大・農）・伊藤 元己（東京大・総合文化）DNA の劣化を防ぐ昆虫乾燥標本作製手法の開発

長岡麟平・佐藤光彦・廣田峻・松尾歩（東北大・農）・Gildas Gateble（IAC）・井鷺裕司（京都大・農）・陶山佳久（東北大・農）MIG-seq 法によるゲノム情報により示されたニューカレドニア産シソ科 *Oxera palmatinervia* の近縁隠蔽種の可能性

佐藤光彦・松尾歩（東北大・農）・木下晃彦・宮崎和弘（森林総研九州）・福井 陸夫（全国食用きのこ種菌協会）・陶山佳久（東北大・農）MIG-seq 法による個体・品種の識別のためのデータ処理技術開発

小沼拓矢（東北大・農）・内山憲太郎（森林総研）・廣田峻・松尾歩・陶山佳久（東北大・農）MIG-seq 法を用いた地域在来系統の探索により示された「南三陸杉」の固有性

Hiroki Taninaka（宮崎大・院・農工）・Haruko Kurihara（琉球大・理）・Hiroshi Yamashita（中央水研・西海区）・Satoshi Nagai（中央水研）・Mitsuhiro Ueno（石西サンゴ礁調査）・Taisei Kikuchi（宮崎大・医）・Nina Yasuda（宮崎大・農）Multidisciplinary evidence suggest new coral divergence within extant blue coral species（*Heliopora coerulea*）in Japan

河合良弥（京都大・農）・伊津野彩子（森林総研）・陶山佳久（東北大・農）・Gildas Gâteblé（IAC）・井鷺裕司（京都大・農）ニューカレドニア産準固有属 *Oxera*（シソ科）の個体群動態推定のための de novo 全ゲノムアセンブル

髙田健司（宮崎大・農）・谷中絢貴（宮崎大・院・農工）・野中正法（美ら島財団・総合セ）・岩瀬文人（四国海と生き物研究室）・菊地泰生（宮崎大・医）・陶山佳久（東北大・農）・長井敏（中央水研）・安田仁奈（宮崎大・農）ミトコンドリアのハプロタイプを共有する宝石サンゴ 2 種の MIG-seq 解析による種境界の検証

青柳優太（九州大・システム生命）・楠見淳子（九州大・社会文化）・佐竹暁子（九州大・理）一年草・多年草・樹木間で DNA 修復能力に違いがあるか？：DNA 修復遺伝子コピー数比較による分析

鎌田真壽・志村晶史（宮崎大・農）・北野裕子（国環研）・井口亮（産総研）・山野博哉（国環研）・長井敏（中央水研）・菊地泰生（宮崎大・医）・安田仁奈（宮崎大・農）温暖化とともに北上したサンゴ 2 種の集団遺伝構造と共生褐虫藻組成

袰岩美月（宮崎大・院・農）・飴田洋祐・佐々木哲朗（小笠原自然文化研究所）・中村隆志（東京工業大・院・環境）・菊地泰生（宮崎大・医）・安田仁奈（宮崎大・農）小笠原と黒潮系（琉球列島・日本本土）のオニヒトデの集団の遺伝構造の解明

満行知花（高知大・理）・渡邊幹男（愛教大・生物）・陶山佳久（東北大・農）日本産低地性 2 倍体タンポポのうち遺伝的に最も分化しているのはどれか？ ～MIG-seq 法による 6 系統 11 集団 798 遺伝子座の集団遺伝学的解析～

永光輝義（森林総研）北海道北部におけるストレスに強いカシワからミズナラの海岸生態型への環境に依存した遺伝的浸透

Wang Yufei（九州大・理）Comparative field transcriptome in masting species to unravel the evolution of reproductive strategies in trees

高野（竹中）宏平（長野県環境保全研究所）・米谷衣代（近畿大学）・三宅崇（岐阜大学）・片桐千仞（数理設計研究所）・片山昇（小樽商科大）・屋富祖昌子（那覇市）・田中良弥・石川由希（名古屋大）クワズイモの送粉成功に寄与する化学成分の探索と送粉者の形質

長谷川佳代・川窪伸光（岐阜大・応生）つる植物のよじ登り対象植物選択の網羅的観察

甘田岳・北山兼弘・小野田雄介（京都大・農）ハワイフトモモにおける葉トライコームの適応的意義 - 葉面濡れ促進効果 -

清水正明（九州大・シス生）・北村系子・韓慶民（森林総研）・佐竹暁子（九州大・理）フィールドトランスクリプトームによるソメイヨシノの開花制御機構の解明

日下部智香・青山のぞみ・小林慶浩・桐山晃平・吉岡俊人（福井県大・生物）越年草と一越年草の生活史分化の鍵形質である種子春化の責任遺伝子の特定

佐藤臨（首都大・都市環境）貝食性ホタルに対するカタツムリの防衛行動と自切のトレードオフ

宮本実穂・大原雅（北海道大・院・環境）外来種ハイミチヤナギの都市環境への適応要因—生活史特性の視点から

萩原幹花・塩尻かおり（龍大・院・農）・石原正恵（京都大・フィールド研）・日浦勉（北海道大・フィールド科学）揮発性化学物質（VOCs）は防衛シグナルの Cue になりえるのか？ -ブナにおける VOCs を介した植物間コミュニケーション-

本庄三恵・伊藤佑・村中智明・西尾治幾（京都大・生態研）・榮村奈緒子（京都大・生態研、鹿児島大・農）・工藤洋（京都大・生態研）季節プライミングは存在するのか？：植物の前歴環境がウイルス感染に与える効果

藤田真由・川窪伸光（岐阜大・院・自然科学技術）渓流植物における河川の増水に対する適応戦略

瀬戸美文・比嘉基紀（高知大・院・理）高知県の小集水域における維管束着生植物 8 種の分布と葉形質

村中智明・本庄三恵・工藤洋（京都大・生態研）自然条件下における遺伝子発現パターンの分類

湯本原樹・杉阪次郎・村中智明・本庄三恵・工藤洋（京都大・生態研）常緑性草本ハクサンハタザオにおける葉寿命および寿命決定要因の季節変化

佐藤莉咲（山形大・院・理工）・富松裕（山形大・理）森林内に生育する植物 2 種の生活史を通じた菌根共生の変化

野村康之（龍大・食農研）・永野惇（龍大・農）年変動を再現した人工気象器内におけるシロイヌナズナの生育パターン

西尾治幾（京都大・生態研）・永野惇（龍谷大・農）・Diana Buzas（筑波大・遺伝子実験セ）・岩山幸治（滋賀大・データサイエンス）・伊藤佑・工藤洋（京都大・生態研）変動環境に対して頑健に季節適応するためのヒストン修飾 H3K27me3 が介在するメカニズム

山本隆聖（熊本大・院・自然科学）・藤井紀之（熊本大・院・先端科学）・陶山佳久・松尾歩（東北大・農）・いがりまさし（植物写真家）・副島顕子（熊本大・院・先端科学）シロスミレとその変種ホソバシロスミレの遺伝構造解析と分布変遷過程の考察

木村富至（福井県大・生物資源）タテハチョウ科ホシミスジの形態差と若狭湾周辺 2 亜種の生息環境からの影響

奥山雄大（科博・植物園）・野口英樹（ROIS-DS ゲノムデータ解析支援センター）・永野惇（龍谷大・農）・豊田敦（遺伝研・ゲノム進化）チャルメルソウ属 2 種のドラフトゲノムとその種分化、適応進化研究への展開

中村直人（京都大・農）バラ目木本植物によるケイ素集積能力の系統を考慮した比較

柿嶋聡（科博・分子セ）・松本哲也（岡山大・院・環境生命）・芹沢俊介（愛知教育大・生物）・邑田仁（東京大・院・理・植物園）・奥山雄大（科博・植物園）網羅的な送粉者相調査と MIG-seq を用いた系統解析から見えてきた日本産テンナンショウ属の多様化メカニズム

鈴木雄登・吉岡俊人・水口亜樹（福井県大・生物）マルバルコウの適応形質である花序当たり花芽数の違い

古川海人・西脇亜也（宮崎大・農）外来植物と在来植物との競争に及ぼす野生馬による攪乱の影響

堂囿いくみ・深津美佐紀・加藤満里子（学芸大・教育）・堀江佐知子（東北大・院・生命科学）・牧 雅之（東北大・植物園）同所的に生育する在来種カタバミ・外来種・雑種間の繁殖干渉

西脇 亜也（宮崎大・農）野生馬放牧地における野外操作実験による外来牧草の侵略条件の解明

西原里実（大阪学院大・経営）・林 一彦（大阪学院大・名誉教授）ササユリの保全を観光資源とするホスピタリティ・ツーリズムマネジメント

前田恵未・西脇亜也（宮崎大・農）高千穂鳥屋岳のスギ人工林における林床植生に及ぼす下刈り管理の影響

石井直浩・松尾歩・廣田峻・佐藤光彦（東北大・農）・後藤亮仁（横国大・環境）・谷口快海・河井勇高（東北大・生命）・須藤瑠衣・巻島大智（横国大・環境）・彦坂幸毅（東北大・生命）・佐々木雄大（横国大・環境）湿原植物群集における種・遺伝子レベルの多様性比較による保全単位の策定

渡部俊太郎・伊勢武史（京大・フィールド研） 畳み込みニューラルネットワークによる航空写真中の植生識別とその応用

中屋智美・西脇亜也（宮崎大・農）絶滅危惧種シルビアシジミの食草ミヤコグサの移植個体の定着に及ぼす影響

都築洋一（北海道大・院・環境科学）・佐藤光彦・松尾歩・陶山佳久（東北大・農）・大原雅（北海道大・院・環境科学）分断された植物集団の存続可能性評価：遺伝的多様性の時間動態は何によって決まるのか

平山大輔・岡田峰尚（三重大・教育）・名波哲・伊東明（大阪市大・院・理）ハイイロチョッキリの枝切り行動とブナ科樹木の隔年結実の関係

芳賀奨平（北海道大・理）・大原雅（北海道大・院・環境科学）一回繁殖型多年生草本オオウバユリの開花個体サイズと開花臨界サイズの関係

小林慧人（京都大・農）・小林剛（香川大・農）野外環境下におけるモウソウチクの開花習性

三木田涼佳・大原雅（北海道大・院・環境科学）クローナル植物スズランの集団維持機構の多様性

山口香春（九州大・理）・森本彩夏（首都大・観光科学）・保坂哲朗（広島大・国際協力）・沼田真也（首都大・観光科学）・佐竹暁子（九州大・理）長期群集フェノロジーデータを用いた半島マレーシアにおける植物の開花・結実の解析

鈴木虎太郎・坂田ゆず（秋田県立大・環境）五葉山のニホンジカに対する植物の連合効果の検証 ～植物種の違いに着目して～

坂田ゆず（秋田県立大）・小林慧人（京都大・農）・蒔田明史（秋田県立大）ササ・タケ類の一斉開花集団における種子食性昆虫数の経年変化

松原慧・杉浦真治（神戸大・農）ハムシ科甲虫の落下行動に寄主植物が及ぼす影響

和田あすか・北山穂高・酒井智彬・堂囿いくみ（学芸大・教育）ヤマトシジミは幼虫の時に食べた餌種を選択して産卵するのか

大崎晴菜（弘前大・農）・千本木洋介（南会津町役場）・坂本祥乃（野生動物保護（株））・宮本留衣（テンドリル（株））・ 田島美和（自然公園財団）・奥田圭（広島修道大・人間環境）・山尾僚（弘前大・農）植物間の競争が植食者の資源選択に与える効果：シロヨメナとニホンジカを用いた実験的検証

杉山英大（東京大・院・理）潜葉虫による落葉促進が葉の餌としての質を向上させる

内田葉子・大原雅（北海道大・院・環境科学）幼虫期に花食者であるゴマシジミは、成虫期に食草の送粉者としても機能するのか

寺田昂平（筑波大・生物）・大橋一晴（筑波大・生命環境）「浮気」するのはどんな虫？：イボタノキの訪花昆虫間における体表異種花粉率の比較

山崎康平・川窪伸光（岐阜大・院・自然科学）アリに対するツリ

フネソウの花序軸の毛の効果
高橋空・大原雅（北海道大・院・環境科学）コウライテンナンショウの雌雄個体間の花粉授受メカニズム －仏炎苞の穴の有無に着目して－
村松雅人（東京大・院・理）タイワンオガタマ：アザミウマにより送粉されるモクレン属植物
大河将寛・坂田ゆず（秋田県大・環境）トガクシショウマの繁殖生態および送粉者の解明
塚原一颯・土田浩治・川窪信光（岐阜大・院・連農）ノアザミ頭花内での微小昆虫アザミウマ類の動的行動解析
阪上洸多・杉浦真治（神戸大院・農）ミズトンボの送粉戦略：キンウワバ類胸部への花粉塊の付着
中西晴香・上島幸悟・堂囿いくみ（学芸大・教育）ヤブガラシ2倍体と3倍体の蜜分泌様式比較
田路翼・石本夏海・江川信・中瀬悠太・市野隆雄（信州大・理）一集団内における送粉者の行動の違いがもたらす花サイズの二峰性-オドリコソウを例に-
宇敷京介・川窪伸光（岐阜大・院・自然科学）岐阜県内におけるツリフネソウ花器の集団間・集団内の形態解析
加藤禎基・中瀬悠太・江川信・市野隆雄（信州大・理）乗鞍岳における外来種アカツメクサの分布拡大要因の推定
中田泰地・矢井田友暉・石井凜・勝原光希・丑丸敦史（神戸大・人間発達）草原性絶滅危惧種キキョウの繁殖生態―花の咲く向きに着目して―
大井真菜・三宅崇（岐阜大・教育）雄性両全性異株植物ミヤマニガウリの雄株と両性株の花粉親成功比較と雄性決定遺伝子の伝達比の調査
三宅崇・山田倖生（岐阜大・教育）琉球列島のサネカズラ属植物に訪花するタマバエ
渡邊謙太・安里咲空良・山城瑠唯・大兼颯・川満日向子（沖縄高専）・園田美穂子（名護市）小笠原諸島と琉球列島に見られる動物被食散布性果実の特性比較
大河龍之介・野田隆史（北海道大・環境科学）植物の空間分布に対して複数種の散布者が及ぼす複合的影響: 3種系を用いた実証研究
林 一彦（大阪学院大・名誉教授）・荒川克郎（ユリ協会）野生自生1個体の絶滅危惧種タモトユリ(*Lilium nobilissimum* Makino) の再発見とその保全

ポスター賞受賞者

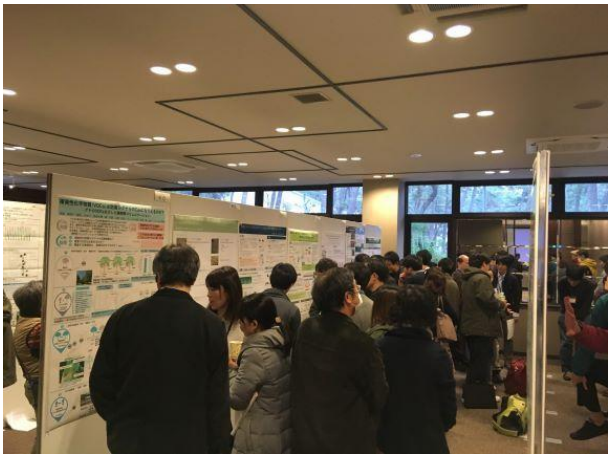
＜種生物学会ポスター賞＞

谷中 絢貴（宮崎大）
田路 翼（信州大）
大河 龍之介（北海道大）

＜河野昭一ポスター賞※＞

長谷川 佳代（岐阜大）
杉山 英大（東京大）
高橋 空（北海道大）

※ 筆頭発表者を学部学生と大学院生（修士）に限定した奨励的ポスター賞です。



事務局からのお知らせ

次号の和文誌は間もなく発行されます――2016 年 12 月に行われたシンポジウム「日本列島の植物に秘められた送粉生態学の新しい展開」に基づく和文誌（第 40・41 号）は、12 月に発行される見込みです。お手元に届くまで、もうしばらくお待ちください。

和文誌の分冊版が販売されています――一部の和文誌（「保全と復元の生物学」「外来生物の生態学」「種間関係の生物学」「ゲノムが拓く生態学」）の分冊版が、大学生協事業センターが運営する電子書籍サイト “VarsityWave eBooks” で販売されていますので、改めてご案内します。個々の章を安価で購入できますので、個人での利用はもちろん、授業等でもご活用ください。詳しくは、http://coop-ebook.jp/ をご覧ください。

英文誌のオンデマンド印刷サービスを廃止しました――すでに電子メールでお知らせしておりますが、これまで希望される方に有料で提供していた英文誌のオンデマンド印刷サービスを、諸事情により今年度から廃止しました。会員の皆様にはご不便をおかけ致しますが、今後はオンライン版をご利用ください。なお、冊子体は Wiley のウェブサイトから引き続きご注文いただけます（従来とは価格が異なります）。またこの変更に伴い、機関（団体）会員は今年度で廃止します。これらの変更は、2019 年度の総会で承認されました。

電子メールアドレス更新のお願い――種生物学会では、さまざまな情報を電子メールで配信しています。メッセージが届かない方は、電子メールアドレスが登録・更新されておりませんので、事務局までご連絡ください。

事務局の連絡先は office@speciesbiology.org です

（庶務幹事　富松 裕）

会計報告

種生物学会　2019年　決算　　期間：2019年1月1日～12月31日

収入の部	予算額	収入
会員会費	1,600,000	1,687,000
購読料	20,000	30,000
バックナンバー	10,000	0
著作権料	100,000	99,099
PSBロイヤリティ	500,000	733,252
その他	20,000	103,506
小　計	2,250,000	2,652,857
前年度繰越金	6,352,008	6,352,008
合　計	**8,602,008**	**9,004,865**

支出の部	予算額	支出
印刷費　Newsletter	30,000	21,642
出版委託費	2,000,000	0
PSB　2019年 Vol34.(1-4)	0	0
和文誌40・41合併号	2,000,000	0
事務費	180,000	217,744
発送費	50,000	55,040
冊子発送作業費	80,000	6,000
その他	50,000	156,704
和文誌編集補助	20,000	0
英文誌編集補助	250,000	250,000
シンポジウム補助金	300,000	300,000
会計監査交通費	10,000	0
学会賞	20,000	0
学会選挙費用	0	0
自然史学会連合分担金	20,000	20,000
日本分類学会連合分担金	10,000	10,000
男女共同参画連絡会分担金	10,000	10,000
予備費	20,000	20,920
小　計	2,870,000	850,306
次期繰越金	5,732,008	8,154,559
.	**8,602,008**	

収入その他（寄付金53,500; シンポジウム残金50,000; 利息6）

種生物学会　2020年度　予算　期間：2020年1月1日～12月31日

収入の部	予算額
国内会員会費	1,600,000
購読料	20,000
バックナンバー	10,000
著作権料	100,000
PSBロイヤリティ	500,000
その他	20,000
小　計	2,250,000
前年度繰越金	8,154,559
合　計	**10,404,559**

支出の部	予算額
印刷費　Newsletter	30,000
出版委託費	3,000,000
PSB　2020年 Vol.35 (1-4)	0
和文誌40・41合併号	
和文誌42号	3,000,000
和文誌43号	
事務費	300,000
発送費	150,000
冊子発送作業費	100,000
その他	50,000
和文誌編集補助	20,000
英文誌編集補助	20,000
シンポジウム補助金	300,000
交通費	50,000
学会賞	20,000
学会選挙費用	0
自然史学会連合分担金	20,000
日本分類学会連合分担金	10,000
男女共同参画連絡会分担金	10,000
予備費	20,000
小　計	3,800,000
次期繰越金	6,604,559
合　計	**10,404,559**

2019年度片岡基金決算報告

（期間：2019年1月1日～12月31日）

収入の部	収入額
利息	4
前年度繰越金	492,075
合　計	492,079

支出の部	支出額
片岡奨励賞副賞	50,000
PSB論文賞副賞（楯）	11,550
振込手数料	330
次年度繰越金	430,199
合　計	61,880

会員数

（2020年9月17日現在）

個人会員	340
一般会員	250
学生会員	90

（会計幹事　堂囿いくみ）

種生物学会ニュースレター 第 53 号

発　行　種生物学会
http://www.speciesbiology.org/
編　集　富松 裕（庶務幹事）
〒990-8560　山形市小白川町 1–4–12
山形大学理学部内 種生物学会事務局
発行日　2020 年 10 月 1 日